総合教育センターだより

Be Connected

センターマスコット　センタ君

平成24年７月１７日(火)
第40号(通算第123号)
京都府総合教育センター
TEL：075-612-3266

校内研修を加速・充実させる！授業研究の進め方

夏季休業期間の校内研修は、１学期の研究•実践をまとめて、２学期以降の授業を充実させるためのよい機会です。この機会に若手教員をはじめ学校全体の授業力アップをめざし、授業研究について、共通理解を図ってみられてはいかがでしょう。

授業研究のためのヒントをいくつか紹介します。詳しくはセンター発行の**「校内研修ハンドブック　実践事例集」**を御覧ください。

お知らせ

研修講座実施に係る計画停電への対応について

平成24年7月2日(月)から9月７日(金)の期間に計画停電が実施される可能性があります。その場合、計画変更が確定しているのは次の講座です。

7月25日（水）　特別支援教育
「通常の学級における特別支援教育」講座
講座開始時刻　10:30→13:00　に変更

他の講座は、原則として予定どおり実施しますが、今後の状況次第で変更することがあります。

その場合、該当講座実施日**前日の13時**にITEC（センターホームページ）に対応について掲載しますので、13時以降に必ず御確認ください。

授業研究を進める上でのヒント

その1　授業イメージの共有化で教科の壁を越える。　実践事例集P32

☆まず生徒の共通する課題を確かめ、その上でどんな授業が「よい授業」なのか、共通理解を図ります。思考力、判断力、表現力の育成、「活用型」授業の実現がポイント！

その2　学習指導案の作成と模擬授業で授業展開を共有化　〃P1

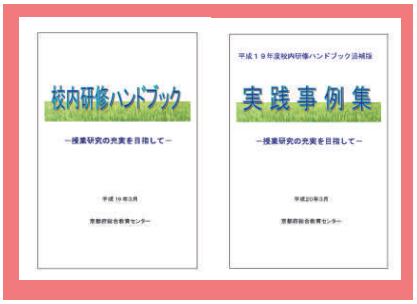
☆学年や教科の教師間で、学習指導案の検討、模擬授業を行います。
・5分間の事前研究→45分の模擬授業→30分の事後研究
・児童生徒の立場から授業を考える視点が新鮮！

その3　評価票とKJ法で参観の観点を共有　〃P4

☆チェック項目を精選した評価票と付箋を組み合わせて授業参観の観点を明確にします。
・「ＫＪ法の付箋つき評価票」が決め手！
・授業のねらいの達成、児童生徒の取組状況や変容、児童生徒の表情やつぶやき、児童生徒のつまずき、児童生徒の反応に対する授業者の対応等が観点！

その4　ビデオを使って授業研究　〃P10

☆授業をビデオ撮影することで、自習時間を作らずに全員が参加できる授業研究が実現できます。
研究協議では子どもの具体的な姿を中心に授業を振り返り、気づいたことを交流します。



「校内研修ハンドブック　実践事例集」(平成19年度 校内研修ハンドブック追補版)は、校内研修（授業研究）の企画・運営の参考になる事例等を掲載した資料集です。

「学習指導案ハンドブック」（平成23年度）は目的に応じた３種類の学習指導案の作成方法について解説しています。いずれもＩＴＥＣ（センターホームページ）から、閲覧・ダウンロードできます。

講座報告

特別支援教育＜発展＞「読み書き障害の理解と支援（発展）」講座 -視機能から考える-

7月5日(木)

かわばた眼科　川端　秀仁　院長

網野南小学校　木下裕紀子　教諭

視機能や視覚認知機能の問題がある子どもにとって、ものがどのように見えているのか、どのような問題が起こるのかを具体的に学びました。また、医療関係者と連携する場合、「視線の向け方」「黒板の文字を探す様子」といった具体的な様子について説明する必要があることも学びました。

小学校の教諭からは、読み書き困難のある子どもへの指導について実践発表がありました。１年生のひらがな指導では、保育所等と連携して体験入学等で運筆あそびを取り入れ、文字学習の土台を築いたり、漢字指導では、通級担当が個別に取り出し指導するだけでなく、各学年の担任の先生方と日常の学級での指導を一緒に考えたりして成果をあげていることが報告されました。

人権教育Ⅰ

つながり格差を克服する学校づくり

7月6日(金)

大阪大学大学院　志水 宏吉 教授　（講義要旨）

人権教育が効果をあげるためには、まずその学校・学級で一人一人の人権が尊重され、人権尊重の精神がみなぎっている環境であることが求められる。

人権に関する知的理解を図る取組を充実させるとともに、今後は人権感覚すなわち価値的・態度的側面と技能的側面についての資質・能力をもっと育む必要がある。

40年前、学力については大都市部が地方より上位であった。生活の豊かさ、経済力が学力に影響している「都鄙（とひ）格差」があった。しかし今は、日本海側の県の学力が高い。

現在、子どもたちの学力は家庭や学校での「つながり」と関係していることが様々なデータから導き出されている。「つながり」が保たれている地域と「つながり」が希薄となっている地域で学力に差が生じており、これを「つながり格差」ととらえている。学力向上の視点からも学校と家庭、教職員と子ども、子どもたち同士の「つながり」を再構築することが重要である。

そのような中で、困難な状況にある子どもが多く在籍しているにもかかわらず、学力の充実について効果をあげている学校がある。その特徴をまとめ、教職員集団の強力なエンジンと学校運営のハンドルを中心とした「スクールバスモデル」を提唱している。

参考著書　「格差をこえる学校づくり」他

人材育成支援室より お薦めの一冊

重松　清 著　「季節風 夏」　（文藝春秋）

季節風シリーズの一冊である。読んでいて微妙な人の感情を、見事にすくい上げているところは、山本周五郎や藤沢周平に似ていると思う。特に「夏」は泣けるものが多く、それがどれも、泣いた後に心がおだやかに溶けていくのを実感する。そうだよな！人間捨てたもんじゃないよ。と秘かに快哉を叫びたくなる。（T．S）